

ギリシアとインドの邂逅 ―貨幣の形態と製造法について―

吉池孝一

1. ギリシアとインドの邂逅

アレクサンドロス大王(在位 336-323 B.C.)の没後、その東征軍の一部が興した王国の一つにギリシア系のバクトリア王国がある。ヒンドークシュ山脈の北側すなわちウズベキスタン東南部からアフガニスタン最北部一帯が故地となっており、この地ではギリシア文字の銘文をもつギリシア様式の貨幣が発行された。いうまでもなく、これはアレクサンドロス大王が発行したギリシア様式の貨幣の影響によるものである。その後、バクトリアの勢力はヒンドークシュ山脈を越えて、インドの西北部に進出し、ギリシアの貨幣様式とインドの貨幣様式が出会うこととなった。このギリシアとインドの邂逅により、貨幣においてもいくつかの新たな展開があったわけであるが、そのうち形態と製造法につき確認する。

2. 方形化したギリシア様式の貨幣

さて、バクトリア王国のギリシア人諸王のうちデメトリオス1世(在位 200-185 B.C.)<sup>1</sup>はヒンドークシュ山脈を越えてインドの西北に進出した王とされる。これ以降の諸王の貨幣とヒンドークシュ山脈以北にとどまっていたころの諸王の貨幣とは異なる面がある。田辺(1992)によると、ギリシア系のコインは円形であるがインド西北に進出した諸王は、円形貨幣を発行しつつその他に、インド貨幣に倣った方形の銅貨を新たに導入したという<sup>2</sup>。

以下に紹介する古代文字資料館所蔵<sup>3</sup>の貨幣は比較的早い時期の方形の銅貨である。エウクラティデス1世(在位 171-155 B.C.)の発行した貨幣とおもわれる。表には王の右向き肖像があり、その周囲にギリシア文字で記されたギリシア語で“偉大なる王エウクラティデスの”とある。裏にはギリシア神の騎馬像があり、その上と下にカローシュティエー文字で記されたインド西北地方の言語で“大王エウクラティデスの”とある<sup>4</sup>。田辺(1992)にあるように、これは方形化したギリシア様式の貨幣ということなのであろう。

<sup>1</sup> バクトリア諸王の系譜と在位年は前田(1992)による。146頁参照。

<sup>2</sup> “インド・ギリク朝の諸王は、……。また、ギリシア系のコインは円形であるが、マウリヤ朝下で発行されていたパンチ刻貨の方・矩形コインに倣って方形の銅貨を新たに導入した”(55頁)。なおここでいうインド・ギリク朝という名称であるが、田辺(1992)によると“ヒンドークシュ山脈以南だけを統治したギリシア人王をインド・ギリク朝とってグレコ・バクトリア朝と区別している。”(55頁)ということである。一般には、デメトリオス1世の息子デメトリオス2世以降ヒンドークシュ山脈以南を統治したギリシア人の王国をインド・ギリク朝というようである。

<sup>3</sup> 愛知県立大学 E511 室内。

<sup>4</sup> 中村(2004)参照。



表



裏

古代文字資料館蔵

### 3. 金型打刻のインド貨幣

インド貨幣の形態には、円形・不定形・長方形・正方形などさまざまなものがあるが、方形の貨幣をもつことが特徴となっている。製造法により銭種をあげるならば、打刻印銭(素材の片面もしくは両面に様々なマークを打刻した貨幣)・金型打刻銭・鑄造銭の三種となるが、初期の貨幣は様々なマークを打刻した打刻印銭であり、この貨幣の存在がインド貨幣の特徴の一つとなっている。打刻印銭は打刻銭の一種であるが、ギリシア貨幣のように全面を覆う金型で挟み込んで打刻するのではなく、マークを一つ一つ打刻したものである<sup>5</sup>。

さて、次の貨幣はインドの金型打刻銭であり、ジョナサン・ウィリアムズ(1998)に類似の貨幣が紹介されている。



表



裏

古代文字資料館蔵

<sup>5</sup> ジョナサン・ウィリアムズ(1998)の172-173頁およびグプタ(2001)参照。なお、インド貨幣の日本語概説として平野(2003)が参考となる。

その紹介によると、この貨幣は紀元前 2 世紀の発行者不明の銅貨で、インド西北のペシヤワール(旧ガンダーラの地)あたりで打刻されたものであるらしい。見てのとおり、表には象がかたどられている。裏はライオンとされており、ライオンの背の上方には卍印がある。インドの貨幣が、ギリシアの貨幣と接触し、ギリシア貨幣の影響を受けたことをみてとることができる。すなわち、デザインの内容はインド的であるが表現は写実的なものとなっている。また製造法にあっては、ギリシアの両面金型打刻という方法を採用するに至っているというわけである<sup>6</sup>。

もっとも、表は全面を覆う金型打刻であるとしても、裏は地金の幅に比して金型面が小さく、ギリシアの両面金型打刻による貨幣とはいささか異なる。裏面はマークを打刻した打刻印銭の様相を呈しており、この点は伝統的なインド貨幣を彷彿とさせる。

#### 【参考文献（発行年順）】

- 田辺勝美編(1992)『[平山コレクション]シルクロードのコイン』,講談社。
- 前田耕作(1992)『バクトリア王国の興亡』(ワグネル文庫),第三文明社。
- ジョン・ウリアムズ編/湯浅起男訳(1998)『図説 お金の歴史全書』,東洋書林。第1刷1998年,第2刷2002年。
- P. L. グプタ著/山崎元一他訳(2001)『インド貨幣史 一古代から現代まで』,刀水書房。もと1969年発行。
- 平野伸二(2003)「古代インドの打刻印貨幣と土着の貨幣 一ブッダの時代から3世紀頃まで一」,『収集』Vol. 28 No. 3, 10-17頁。
- 中村雅之(2004)「カローシュティ文字貨幣3種」,『KOTONOHA』第22号,1-3頁。

---

<sup>6</sup> 製造技術の変化について、グプタ 2001 の「第 5 章北インドの地方貨幣(後マウリヤ朝から前グプタ期)」に“この時代に製造されたその他の貨幣は、鋳型から鋳造されるか—これはマウリヤ期の銅貨に使用された技術である—、あるいは打型を使って造られた—これはインド・ギリシア人の時代に導入された技術である—。”(39 頁)としてこの貨幣が紹介されている。